

< 幼児教育 >

幼児が主体的な活動に取り組むための援助の在り方
～ 場面に応じた言葉かけの工夫を通して～

宜野湾幼稚園教諭 上原 直子

目 次

テーマ設定の理由	1
研究目標	1
研究仮説	1
研究の全体構想図	2
研究内容	
1 「主体的な活動に取り組む幼児について	3
2 教師の援助について	3
3 幼児期の発達について	4
4 環境と教師の役割について	5
5 教師の言葉かけ	6
検証保育	
1 学級の実態	1 1
2 保育観	1 1
3 クラスのひとときの活動計画	1 1
4 本日の流れ	1 2
5 クラスのひとときの流れ	1 3
6 検証保育研究会	1 4
仮説の検証	
1 具体仮説 の検証	1 5
2 具体仮説 の検証	1 7
研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	2 0
2 今後の課題	2 0
3 おわりに	2 0

< 主な参考文献 >

<幼児教育>

幼児が主体的な活動に取り組むための援助の在り方 ～場面に応じた言葉かけの工夫を通して～

宜野湾幼稚園教諭 上原 直子

テーマ設定の理由

社会環境が著しく変化している現代社会において、「人と人とのつながりの希薄化」も進行している人との関わり方がわからずにいる人や傷つく事を恐れ、人と関わりたくないと避けている人が増えてきた。当然、人と関わりを持たなければ、傷つくこともない。しかし、「生きていく楽しさ」は、自分を取り巻く様々な人々との営みの中に存在する。そのような社会の中で、幼児が人とかかわりながら、共存していくための「生きる力」の基礎を培う必要があると考える。

平成20年3月28日公示された幼稚園教育要領の領域「人間関係」の中で、「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようになるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」が新たに盛り込まれた。つまり、幼児が人とかかわる力を育成するためには、幼児理解を基盤に教師は幼児が主体的に活動を展開できる環境（物的・空間的・人的）を整え人と関わるためのコミュニケーションの能力を高めていくことが肝要であるととらえる。

今までの保育実践を振り返ってみると、子どもたちが自立し主体的に行動していくには、生活する上でのルールを教えていく必要があるという思いが先行し、「集団のルールの定着」ばかりに重きをおき、集団の中でのルールを繰り返し指導したり、集団行動を意識して声をかけてきた。その事により、何をしても「それをしたら、先生に叱られるよ」「ダメだよ」と批判的な声が多く聞かれたり、「これで遊んで、いい？」と教師を意識しながら行動することが、多く見られるようになり、結果として指示待ちの子がみられるようになってきた。そのことから、教師主導の保育であったと考える。

幼児が主体的に活動に取り組み、人と関わりをもつようになるためには、環境（物的・空間的・人的）の構成の見直しが必要であると考え。その中でも、人的環境である「教師」の役割が、もっとも重要と捉え、幼児が主体的に活動に関わりようようになるための教師の援助の在り方を見直す必要がある と考え本テーマを設定した。

研究目標

幼児が主体的な活動に取り組むための教師の言葉のかけ方、援助の在り方を探る。

研究仮説

1 基本仮説

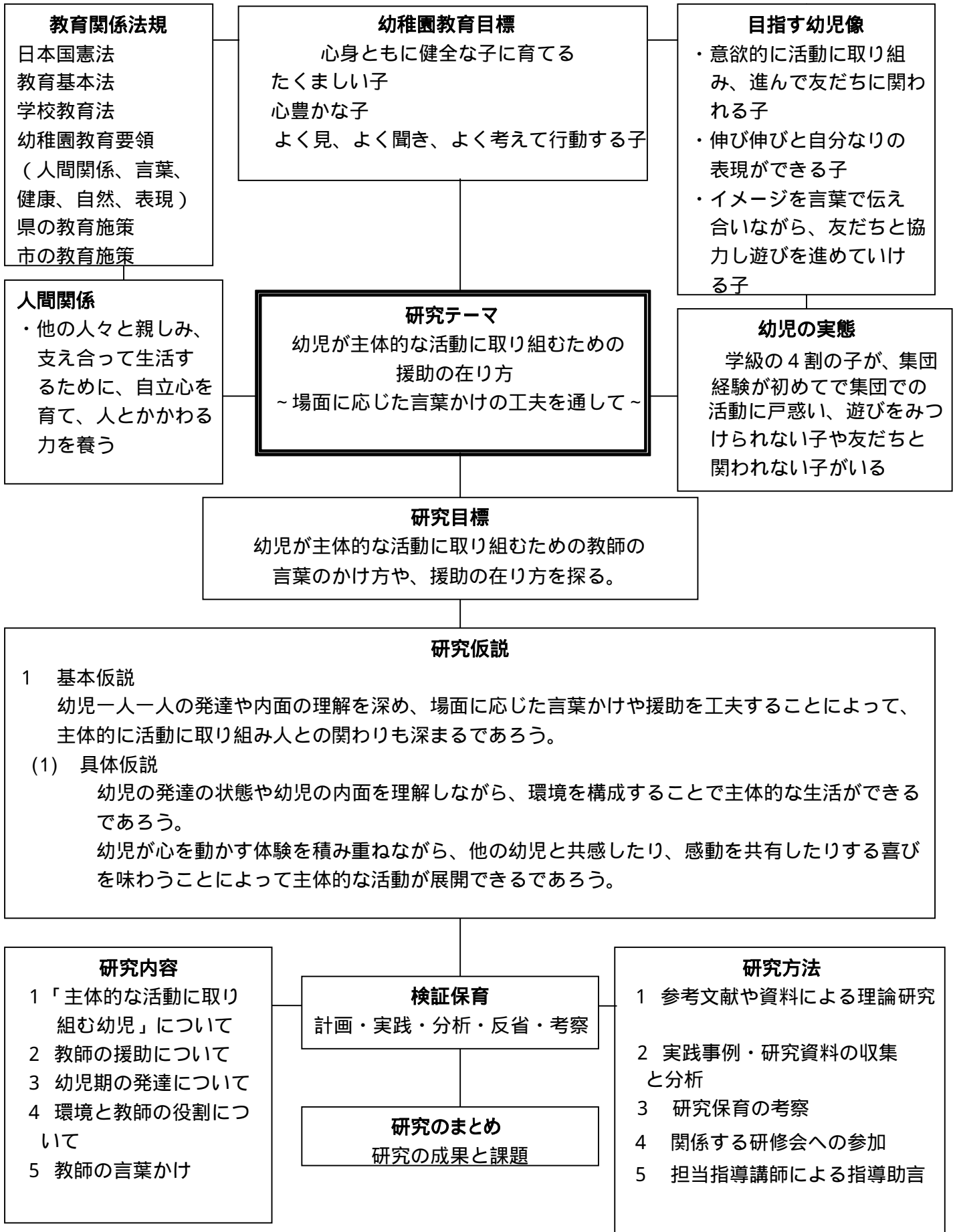
幼児一人一人の発達や内面の理解を深め、場面に応じた言葉かけや援助を工夫する事によって、幼児が主体的に活動に取り組み人との関わりも深まるであろう。

(1) 具体仮説

幼児の発達の状態や幼児の内面を理解しながら、環境を構成ことで主体的な生活が展開できるであろう。

幼児が心を動かす体験を積み重ねながら、他の幼児と共感したり、感動を共有したりする喜びを味わうことによって、主体的な生活が展開できるであろう。

研究の全体構想図



教育関係法規

日本国憲法
教育基本法
学校教育法
幼稚園教育要領
(人間関係、言葉、
健康、自然、表現)
県の教育施策
市の教育施策

幼稚園教育目標

心身ともに健全な子に育てる
たくましい子
心豊かな子
よく見、よく聞き、よく考えて行動する子

目指す幼児像

- ・意欲的に活動に取り組み、進んで友だちに関わられる子
- ・伸び伸びと自分なりの表現ができる子
- ・イメージを言葉で伝え合いながら、友だちと協力し遊びを進めていける子

人間関係

- ・他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う

研究テーマ

幼児が主体的な活動に取り組むための援助の在り方
~場面に応じた言葉かけの工夫を通して~

幼児の実態

学級の4割の子が、集団経験が初めてで集団での活動に戸惑い、遊びをみつけられない子や友だちと関われない子がいる

研究目標

幼児が主体的な活動に取り組むための教師の言葉のかけ方や、援助の在り方を探る。

研究仮説

1 基本仮説

幼児一人一人の発達や内面の理解を深め、場面に応じた言葉かけや援助を工夫することによって、主体的に活動に取り組み人との関わりも深まるであろう。

(1) 具体仮説

幼児の発達の状態や幼児の内面を理解しながら、環境を構成することで主体的な生活ができるであろう。

幼児が心を動かす体験を積み重ねながら、他の幼児と共感したり、感動を共有したりする喜びを味わうことによって主体的な活動が展開できるであろう。

研究内容

- 1 「主体的な活動に取り組む幼児」について
- 2 教師の援助について
- 3 幼児期の発達について
- 4 環境と教師の役割について
- 5 教師の言葉かけ

検証保育

計画・実践・分析・反省・考察

研究のまとめ

研究の成果と課題

研究方法

- 1 参考文献や資料による理論研究
- 2 実践事例・研究資料の収集と分析
- 3 研究保育の考察
- 4 関係する研修会への参加
- 5 担当指導講師による指導助言

研究内容

1 「主体的に活動に取り組む幼児」について

「主体性」とは、『広辞苑』によると「ある活動や思考をなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま」、『幼児の教育用語事典』によると、「自ら問題を自分自身の問題としてとらえる積極的な構えをいい、その行動は自らの意志によって決定される。つまり、自分で考え、自分で行動を選択する能力である」とある。また、幼稚園教育要領解説の中で「幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返し、自ら発達に必要なものを獲得しようとする意欲や生活を営む態度、豊かな心」とある。

このようなことから「主体的に活動に取り組む幼児」とは、「自ら生活の場において、教師から指図されないで自分の考えや意志で動く事のできる幼児。つまり、自ら活動に取り組もうとする心情、意欲、態度が備わっている幼児の姿。」と捉える。

2 教師の援助について

「幼稚園教育要領解説」に、「幼稚園生活においては、何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤にしながらかつて様々なことを自分の力で行う充実感を味わうようにすることが大切」とある。教師は幼児一人一人のかかわりの中で、信頼関係をつくり出すことが、もっとも重要なことであるといえる。

人は誰しも他の人の言葉や表情、態度などから気持ちが一喜一憂する。幼児も、もちろん同じで教師は、幼児一人一人との関わりの中で、それを意識し接していく必要があると考える。幼児一人一人をありのままに受け止め、幼児の気持ちに共感し、幼児の言動や表情から何を感じているのか、何を表現したいのかをよみ取り、必要なときに声をかけたり、手を差し伸べる、また、寄り添うことが援助だと捉える。そのことによって、幼児と教師の信頼関係が生まれ幼児は温かい気持ちを持ち、安心や安定の中で、教師に心を開いていくと考える。

そこで、教師の援助の進展について、森上史朗氏(1997)の資料を参照に図1のように考えた。

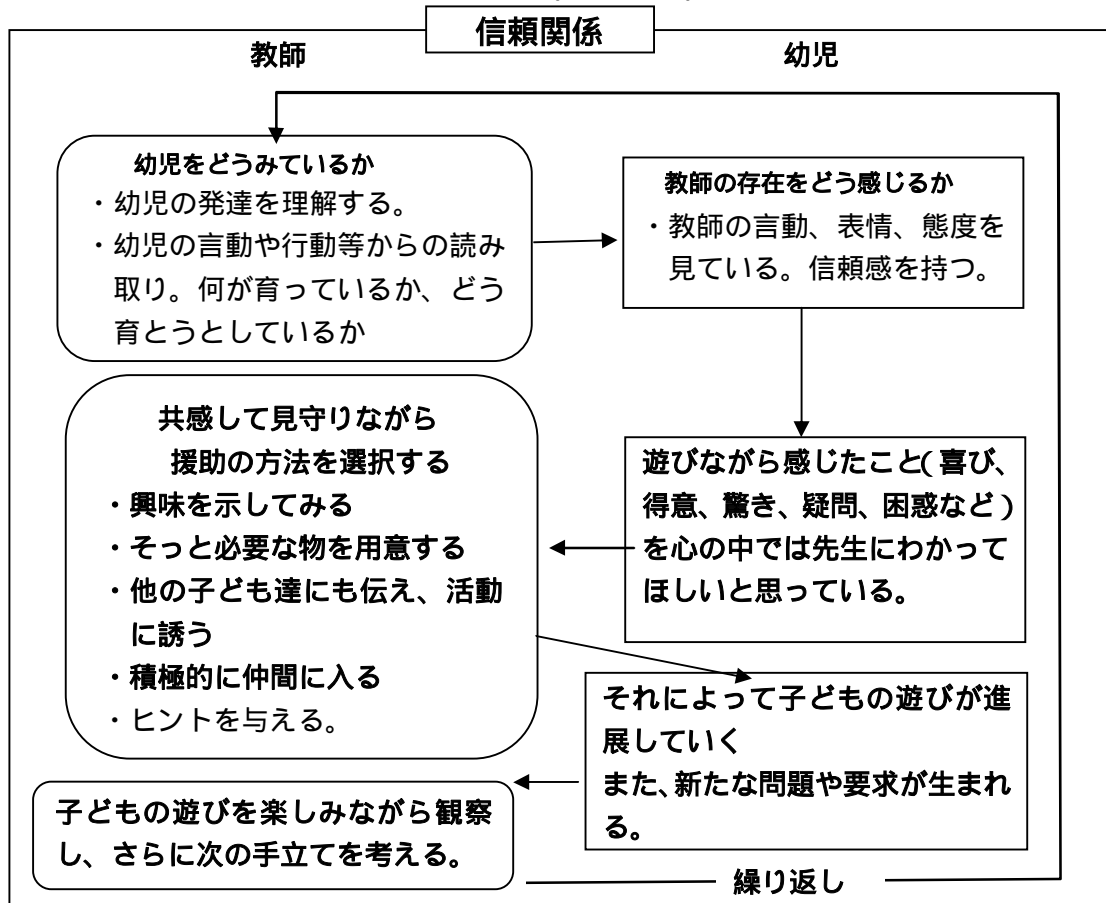


図1 教師の援助の進展

3 幼児期の発達について

幼児を理解する上で、「何故このような行動をとるのか」「この行動の次には、どういった動きをするのか」を予想していかなければ、適切な援助ができない。幼児を理解するのに必要なことは、幼児期の子どもたちの発達の特性を知ることである。森上史朗（1998）によると、幼稚園生活における幼児の発達の道筋を「発達の過程」ととらえている。そこで、表1のように幼児の発達過程と生活する姿をまとめた。

表1 幼児の発達の過程

発達の過程	生活する姿
() 一人ひとりの遊びや教師との 触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ安定して <u>いく時期</u>	ア新しい生活に緊張や不安感があり、教師とともに動こうとする。 イ家庭で親しんだ玩具や遊具などをもったり使ったりして遊ぼうとする。 ウ他の幼児とのつながりはあまり見られず、自分が安定できることで遊ぼうとする。 エ固定遊具やボールなどを使ったり、追いかっこなど体を動かす遊びを好む。
() 周囲の人や物への興味や関心が広がり、生活の仕方や きまりが分かり自分での遊びを <u>広げていく時期</u>	ア教師の言動に敏感で教師の意図に沿った動きをしようとする。 イ他の幼児への関心が強くなり、いつも一緒にいたい2～3人の友だちができてきるとともに、トラブルも起こりやすくなる。 ウ新しい素材や遊びが提示されると興味をもって取り組もうとする。 エ遊びの中でおしゃべりが多くなる。 オ戸外で活動することを好み、体を動かして表現することを喜ぶ。 カ幼稚園での生活の仕方が大体分かり、自分の身の回りのことは自分でしようとする。
() 友だちとイメージを伝え合い共に生活する <u>楽しさを知っていく時期</u>	アいつも一緒に遊ぶ友だちができるが、それぞれの自己主張が強くなる。 イ友だちの遊びからの刺激を受けて遊びが広がる。 ウ知的好奇心が高まり、身近な事象に興味をもってかかわる。 エルールのある遊びに興味をもつようになり、援助があれば皆と一緒に生活する場を整理しようとする。
() 友達関係を深めながら自己の力を十分に <u>発揮して生活に取り組む時期</u>	ア友だちとの遊びの進め方などを相談しながら自分達で遊びを展開しようとする。 イ遊びの内容が豊かになり、工夫したり試したりすることを楽しむ。 ウ想像をめぐらしながら様々な表現活動を楽しむ。 エグループ同士でゲームなどを好んで行う。 オ当番活動など、自分の役割を果たそうとする。
() 友だち同士で目的をもって幼稚園生活を <u>展開し深めていく時期</u>	ア一つの目的に向かって学級の友だちと一緒に協力して活動を展開することができる。 イ身近に起こる出来事などに関心をもって自分たちの遊びに取り入れることが盛んになる。 ウ遊具や用具などを自分たちの活動に合わせて、様々に取り組み合わせて使おうとする エ幼稚園生活の中で、ある程度の見通しをもって活動を展開する。 オ必要に応じ指示に従うなどの集団行動がとれるようになる。

表1から、幼稚園生活の中で幼児の発達は、入園当初の一人一人の遊びや教師とのふれあいを通して、園生活に親しみ安定していく時期から、友だち同士で目的をもって園生活を展開し深めていく時期にいたるまでに、様々な過程を経ていく。つまり、幼児は周囲の環境（人的環境、物的環境、空間的環境）との関わりの中で、自立し主体的な生活を展開していくのである。

従って、教師は、幼児の発達の過程を理解し、適切な環境を構成することが、幼児の主体的な活動を促すことにおいては、とても重要である。

4 環境と教師の役割について

(1) 環境について

環境とは、遊具や素材などの物的環境、友だちや教師などの人的環境ばかりではなく、自然や社会の事象・幼児を取り巻く状況、時間や空間などがあり、幼児を取り巻く全てのものをいう。

「幼稚園教育要領解説」の中で幼稚園教育の基本は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うこと」とあり、さらに「幼児は、生活を通して周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け、自分から興味をもって環境にかかわることで充実感や満足感を味わう体験がなされなければならない」とある。ゆえに教師は、幼児の主体的な活動が展開されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならないと考える。

そこで、幼児が主体的に活動に取り組むための環境を構成する際に、大切なことを様々な文献を元に下記のようにまとめた。

幼児が自主的な選択や創造的な生活ができるためには、「やりたいこと」をおもいきりやる時間や好きなように使える空間、自由な雰囲気をつくる。

広がる幼児の興味や欲求に基づいた環境を構成し、幼児の言動に応じて環境を再構成していく。教師が主導的に活動を創り上げていくのではなく、幼児の主導的な活動を軸にした園生活を構成していく。

人的環境である教師の言葉かけや表情、態度等を幼児の発達・状況等に合わせ適切に行う。

(2) 教師の役割

「幼稚園教育要領解説」によると「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が様々な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作業者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」とある。そこで「教師の役割」を表2のようにまとめた。

表2 教師の役割

幼児のよき理解者	教師は幼児一人一人に適切な援助ををするためには、幼児の生活や遊びの経験を把握し幼児の実態を理解を得ること。そして幼児がどこで、誰と何をしているかをしっかり、とらえておく必要がある。こうした幼児理解は幼児一人一人を教師が認知するために必要であり、援助の立場からも不可欠である。
幼児との共同作業者、共鳴するもの	幼児は全身で、気持ちを表現する。教師は幼児に合わせ同じ様に動く、同じ目線に立って見つめる。同じものに向かうことによって、幼児の心の動きや行動が理解できる。幼児と向き合うのではなく、同じ向きで動きを共有することである。
憧れを形成するモデル	教師がある活動を楽しみ、集中して取り組む姿は、幼児を引き付けるものとなる。よって、教師は、演技者や表現者のようにその姿を見る者が、憧れをもち引きつけられるように自らを形成する必要がある。また、幼児は、教師の日々の言動や行動する姿をモデルとして善悪の判断、いたわりや思いやりなどの道徳性、生活上のきまり、場面に応じた言葉といった多くのことを学ぶ。このようなことから、教師は自らの言動が幼児に影響を与えることを認識しておくことが必要である。
援助者	幼児の遊びが、深まっていなかったり、課題を抱えているときの教師の援助は大切である。それは、幼児ができるだけ自分で困難を乗り越えようとする気持ちを大切にして援助を行う必要がある、そのタイミングを見極める必要がある。それには、幼児の実態をよく理解し、一人ひとりの発達に応じた援助の仕方が必要である。

教師は、多角的な視点から幼児の姿をとらえ、幼児の特性や発達の課題を把握し、目の前で起こっている出来事から、そのことが幼児にとってどのような意味をもつかをとらえる力を養う必要がある。幼児が望ましい発達をし、自ら活動を選択していくことができるよう、きめ細かな援助が重要である。

5 教師の言葉かけ

幼児が主体的に活動に取り組むために、教師は「幼児の活動」の様々な場面に応じて適切な援助を行わなければならない。小川博久は、「幼児の主体的行動を誘発するのは、教師の言葉を含めた行動全てである」といい、吉村真理子（1998）によると「援助は時々の状況に合わせて、適切な手段をとらなければならない。そのもっとも多いのがことばかけである」と述べている。よって、教師のことばかけは、もっとも重要だといえる。

(1) 教師が心掛ける言葉かけ

幼児に対する教師の言葉かけは、重要なことと捉え保育に当たらなければならないが、どのようなことに重きをおいて心掛けていけなければならないか安部明子（2005）を参考にまとめた。

（教師の話し方）

- ・おだやかで、しっかりした話し方は、子どもに自信と安心感を与える。
- ・簡単に率直に話すのが最も効果がある。
- ・子どもは教師の話し声に敏感である。子どもと目を合わせ、静かに話すことを常に意識し声の調子を明るくしてみることで気持ちも変わってくる。

（聞く事）

幼児一人一人を理解しようとするところに、豊かな保育の展開と実りがある。そのためには、子どもの話すことに真剣に耳を傾け、子どもとともに悩み、ともに発見し、ともに感動していくことが大切である。

（豊かな語りかけ）

幼児にかかわる教師の言葉や、そこで展開されるやりとりの質は、幼児に多大な影響を与える。よって、教師は日常の中で使用している言葉をもっと大切に、豊かな言葉を使って幼児と接していく必要がある。

（幅広い生活経験）

教師も、生活経験を広げていかなければならない。生活経験を広げることは、身近な事象について細かい注意を払うことになる。言葉についていえば、きれいな言い方と聞きとりにくい言い方、温かい表現と冷たい表現など、言葉の選択や表情に影響が与えられる。

(2) 場面とは

「場面」とは、一日の生活の流れの中の「基本的生活習慣を必要とする場面」と遊びの中の「喜び・発見の場面」、「葛藤の場面」、「自分なりに課題をもって取り組んでいる場面」、「遊びが広がっていく場面」と捉え、幼児の言動や行動をもとに、教師の対応と課題及び解決方法を以下にまとめた。

一日の保育の流れの中の基本的生活習慣を必要とする場面

生活の流れ	幼児の言動・行動	教師の言葉かけ・援助	改善点
順次登園 (朝のあいさつ)	・元気よくあいさつする子、はにかみながらあいさつする子、保護者にくっついてくる子。	「さん、おはようございます」 「おはよう、いい天気で気持ちいいね」 ・一人ひとりを笑顔で挨拶や言葉をかけたり、スキンシップをとりながら、心の安定を図る。	<u>朝の出会い</u> ・幼児と親しみの気持ちをもって、朝の出会いを喜ぶ気持ちをわかち合う。それは、教師が微笑みとともに、あいさつや声かけとして表していく。また、名前を呼ぶ事で、幼児と教師の関係性の成立（自他の意識）

朝のひととき	<ul style="list-style-type: none"> ・家での様子を自分なりの表現で、伝えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを伝えたい幼児の話をも十分に聞く。 	<p><u>幼児を受入れる</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児の話も聞き、一人ひとりを受け止め、信頼関係を深めたい。この姿勢を大切にす。
所持品の始末	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の出会いに喜びを感じ、友だちと話しをし、そのまま遊びに流れ、所持品の始末を忘れる子がいる。 	<p>「片付けをしてから、遊ぼうね」 「 さん、片付けしてないよ」</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の指示で片付けを行っているため、片付けを必要と感せず、同じことを繰り返す。 	<p><u>遊びの身支度をす</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「遊びに取り組むための身なりを整える」ということを念頭に置き、言葉かけを行う。
朝の会 (クラスの集まり)	<ul style="list-style-type: none"> ・歌、リズムを楽しむ。 ・朝のあいさつをする ・出席確認、一日の流れ(行事の時間の組み方等)の確認を行う <p>「今日は遊べる？」 「外でも遊んでいい？」 「やったー、今日は外で遊べるってよ」</p>	<p>「お集まりしましょう」 「大きな声で朝のあいさつをしましょう。おはようございます」 「今日は、子ども朝会をした後、朝の活動をして、 時間まで好きな遊びの時間です」</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所持品の始末を終えた幼児は遊び始めていて、片付けをして集まるのに時間がかかる。 ・朝の出会いであいさつをしたが、再びする必要があるのであるのか。 ・幼児の言動から、教師が遊びを許可しているような会話になっていたのではないかと考える。それと同時に、十分な遊びの確保ができていなかったのではないか。 	<p><u>朝の会の必要性</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「やりたいこと」をおもいきりやる十分な時間の確保を行うため、一日の保育の見直しを職員共通のもとに行う。週行事、一日の流れの組み方等 ・園行事、時間(行事の始まる時間、好きな遊びの時間、片付け時間)については、スケジュール表(一日の流れ、一ヶ月の行事等)を掲示し、幼児自身、見通しが持てるようにする。 ・好きな場所で、好きな遊びをしてもいい雰囲気をつくる。
朝の活動 (掃除)	<ul style="list-style-type: none"> ・動植物の世話をす。 ・園庭掃除をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで活動に取り組んでいる幼児の姿を捉え成長したことを伝える <p>「お世話の仕方が上手になったね」</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで世話をしていない子への対応。 	<p><u>教師がモデルになる</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師がやっている姿をみて「やってみたい」という気持ちを高める。 ・自分達で「やった」「できる」気持ちを大切に、言葉かけをする。
遊びの中で	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びに必要な言葉を交し合う ・道具や遊具などの正しい使い方やルールがわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集まりの場で、ルールを説明して、遊具を提供する。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師がルールを話しそれに従うことで、遊びが十分深まらないことがあった。 	<p><u>規範意識は幼児の中から</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達に応じた意図的・計画的環境構成を図る。 ・幼児は、友だちとの関わりの中から、ルールや社会性に気付くようになってくる。

片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・使った物を片付ける 	<p>「頑張っているね～」「気持ちよくなってきたね」</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の指示で片付けを行っているため、片付けを必要と感じていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の終わりや生活の終わりに使った物を元に戻し、きれいになった事を気持ち良いと思えるように生活のリズムとして身につけていく。
<p>ミルク弁当</p> <p>ミルク弁当 (食事の時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手洗い・うがいをする。 ・準備をする <ul style="list-style-type: none"> ・当番の声かけであいさつをしている。 <p>「いただきます、ごちそうさま」が言える</p> <p>「もう、終わりにしていい？」</p>	<p>「手洗い、うがいはしましたか」</p> <p>(となえ言葉)</p> <p>「用意は、いいですか？手を合わせてください。おいしい弁当いただきます」「いただきます」</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パターン化したあいさつによって、実感のない言葉になってしまっているのではないか。(偏食のある幼児への対応) <p>「頑張って食べてごらん」</p> <p>「今日は、半分まで飲んでみよう」</p> <p>課題</p> <p>全部食べる事ばかりに重きがかれ、楽しく食べる雰囲気になれなくなっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手洗い、うがいの必要性を絵本や素話等の児童文化財を用いて指導する。 ・「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつが、形式的な「となえ言葉」になってしまわないように、意識してあいさつの大切さを伝える。「となえことば」とは、毎日同じ様に形式的に繰り返される言葉のこと。 ・何故、ミルクを飲むのか絵本や素話等の児童文化財を用いて食育指導につなげる。 ・「ミルクはカルシウムが入っていて、骨が丈夫になるよ」
掃除	<ul style="list-style-type: none"> ・片付ける ・うがい、歯磨きをする <ul style="list-style-type: none"> ・グループで掃除分担場所に別れて掃除する。 <p>「もう、終わり？」</p>	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・汚いから掃除をするではなく与えられた時間だから、掃除をするという幼児がいる。 ・掃除時間の終了を聞く子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掃除分担をやめ、掃除は「汚れたところを掃除する」という意識を持たせる。掃除の仕方がわかるようになったら幼児に任せる。
課題活動	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を描く。 ・折り紙を折る。 <p>「先生、できない」 「描けない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の見本とそっくりの作品に仕上がる子がでてきた。 ・その課題活動から、離れてしまう子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が見本を見せ、絵を描かせてきた。 ・描かせたい絵を誘導的な質問をしながら子どもたちにイメージさせていた。 ・時間を決め取り組んできた。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品を残すことばかりに重きをおきすぎてなかったらどうか。 ・発達に応じた課題選択ができていたか。 ・幼児の興味のあるものを取り上げることができていたか。 	<p><u>幼児の興味の向いているも</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活の流れの中で、幼児の興味が向いている事を膨らませ課題活動を組む。 ・絵を描く活動がほとんどだったが、造形、ゲーム等、いろいろな課題活動を取り入れる。 ・幼児のイメージを大切にしたい働きかけを行う。 ・発達段階を見ながら、教材を精選する

<p>クラスのひととき</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・帰りの準備 ・絵本を見る ・絵本の読み聞かせが好き。物語に集中している。 <p>教師の話を聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちと話をしている。 ・相手の話を聞かず、自分の想いを話す子 ・友だちとふざけ合っている。 <ul style="list-style-type: none"> ・一日を振り返って、気付いたこと、楽しかったこと等を発表する。 <p>(となえことば)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体で帰りのあいさつ教師と一人一人あいさつをして帰る。 	<p>「時間までに、帰りの準備をしてね～」</p> <p>「忘れ物がないようにね～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本、紙芝居の読み聞かせをする。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本や紙芝居の読み聞かせが、ほとんどである。 <ul style="list-style-type: none"> ・話を聞く態度を身につけさせることに意識し常に声をかけてきた。 ・話を聞いていない子に対して「話を聞く態度はどうだった？」と問いかけ、あたかも幼児自身に考えさせ気付かせるような言葉かけをしてきた。 「話を聞くときの姿勢・お口はチャック・目を見て話しを聞く・三角座りで背筋はぴん」 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「集まりの場」において、静かに座っていられるようになったがボーっとしていたり、話の内容を理解し聞いていない幼児が見られるようになってた。 ・人前で話をするという経験をさせまた、人の話を聞く態度を育てたいという思いで、一日の振り返りを発表という形で行ってきた。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回、同じ幼児が発表する。他の幼児は、その成り行きを見守ったり、他児と話したり、友達の話に興味をもって聞いていない様子が伺える。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パターン化した帰りかたである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉で準備させるのではなく準備を見守り、待つことも大切。曲をかけたり、手遊びをしながら最後の幼児が準備するのを待つ。 ・児童文化財（絵本、紙芝居、人形劇、パネルシアター、ペープサート、言葉遊び等）を積極的に取り入れ、教師との信頼関係を深め、安定した情緒を獲得していく。 ・必要に応じて課題になる話題を取り上げ話し合いをもつ ・幼稚園では「聞く態度」を養うのではなく、「聞く気持ち」を養うことを心がけ、教師は話し方を工夫していく。一つの事について互いに心を寄せて考え合い共通の話題でイメージを膨らませ、思考する場面を設定できるよう教師は配慮していく。 ・「明日も幼稚園に来たいな」と思えるような魅力ある帰り方を工夫する。 クイズ、言葉遊び 等
-----------------	---	---	---

遊びの中から教師の言葉かけ・必要とする場面

遊びの中での場面	今までの教師の対応と課題	解決方法
<p>(喜び・発見の場面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しいものをみつけた時、できるようになった時、教師に話したくなる。 	<p><u>共感者</u></p> <p>「すごいね」「よく気がついたね」「大発見だね」と、共に喜びあう。</p> <p><u>課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・喜びも発見も「すごいね」の一言で済ませている事に気づく。 	<p><u>具体的に共感</u></p> <p>どのようなことがすごいのか、どのようなことが成長したのかを教師が具体的に伝える。ことによって、幼児は伝え方を学び、自分の行為が経験として位置づけられ、濃密化していく。</p>
<p>(葛藤の場面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発端となる原因は様々。幼児は、自分の思いが通らなかった時、自我を主張する時等に喧嘩となる。 	<p><u>けんかの裁判官</u></p> <p>その場の状況や互いの思いを聞き、それぞれ当事者の立場になって互いに考えさせてきた。最終的には、教師が解決した。</p> <p><u>課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児同士が、消化不良のまま、違う形で、再び喧嘩することもあった。 ・自分達で解決していく力が育たない。 	<p><u>幼児の仲裁者</u></p> <p>葛藤の場面は、幼児が人間関係や社会性が育っていく。成長していく上で大切な事と捉え、成り行きを見守ったり、幼児同士解決の糸口をみつけ出せるような言葉をかける。</p> <p>時には、状況や幼児の発達を見極め、仲裁に入り気持ちの代弁者になることも大切。</p> <p>そこで、大切な事は、幼児同士で解決していくよう援助していく事である。</p>
<p>(自分なりに課題をもって取り組んでいる場面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに目標を持ち、取り組んでいる。 ・時には、課題をクリアできず、諦めようとしたり、投げ出すこともでてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「もう少しで、できるようになるね」「がんばれ」 励ましたり、できた事を喜び共感する。 <p><u>課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・失敗しても「大丈夫、できるようになる」と励ましの言葉かけが多かった。 ・課題がクリアできず、諦める幼児がでてきた。 	<p>励ましと前進した時の喜びを共感する。</p> <p>「頑張ってるね」「昨日は、1歩歩いてたけど、今日は5歩も歩けたよ」</p> <p>失敗がプラスになるようなヒントを与える声かけをする。</p> <p>頑張っている姿、過程を認める言葉かけ</p> <p>「諦めず、毎日頑張っていることがすごいことだよ」</p>
<p>(遊びが広がっていく場面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちと同じ場で遊んでいるが、それぞれで遊びを楽しんでいる。 ・友だちと一つの遊びで盛り上がっているが、同じ遊びを繰り返している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの中で、遊具を提供したり「こんなやり方は、どう？」とやり方を見せていた。 <p><u>課題</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びを広げようとするあまり、教師が誘導しようとしてしまう。その結果、その遊びから離れてしまう幼児がでてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は、幼児の動きを見ながら何を楽しんでいるかを見極め環境を構成していく。 ・他児とのつながりが持てるような言葉かけを意識し、一緒に遊びに関わる。その際、幼児の言動や動きに添って、行動する。

検証保育指導案

平成20年1月16日(金)

宜野湾幼稚園 たんぼぼ組

男児17名 女児16名 計33名

教諭 上原 直子

指導講師 大湾 由美子

1 学級の実態

入園当初より、集団生活に戸惑いを感じ、泣いて登園する子や保護者から離れられない子が多くまた、一人で遊んでいる子が目立っていた。二ヶ月たった頃からは、徐々に幼稚園生活に慣れ、気の合う友達や小グループで遊んでいる幼児がいる反面、教師の傍らで過ごす子や活動を進めることに戸惑いが見られ「これで遊んでいい」と教師に聞くなど、自信を持って活動に取り組めない子、遊んでいても「先生に聞かないとダメだよ」と、教師を意識し活動する子がみられるようになった。

二学期に入り、友達の広がりが見られるようになり、教師から離れ小グループでまとまって遊ぶようになってきたが、友達の刺激を受け遊んでいるものの遊んでいても、仲間と協同して活動し、一つの遊びを持続し発展していく楽しさを経験することができていない。

2 保育観

二学期後半の幼児の発達として、「友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期」であり、「友だちと遊びの進め方などを相談しながら自分達で遊びを展開しようとする」姿がみられなければならない。しかし、学級の実態から「友だちの遊びから刺激を受けて遊んでいる」が、その遊びが持続せず、遊びが展開していく様子がみられない。そのことから、集団で楽しめる遊びを積極的に取り入れてこなかったからではないかと考える。検証保育では、集団遊びのゲームやリズム、児童文化財を活用して、一つの話題で話し共通のイメージを持つことを楽しんできた。そのことから、クラスのひとときで楽しんだゲームを好きな遊びの時間で引き続き遊んだり、徐々に自分達でゲームを進めていく姿など主体的に活動を展開していく姿みられるようになってきた。本日は、クラスのひとときの中で、場面に応じた言葉かけや援助を行うことによって、主体的に話し合いや集団ゲーム遊びを自分たちで展開していけるようにする。

3 クラスのひとときの活動計画

日付	クラスのひととき	日付	クラスのひととき
1/6	指人形「プーちゃんとの出会い」 言葉あそび「音節遊び」	1/7	リミック フォークダンス「おさななじみ」
1/7	指人形「プーちゃんとお友達」 言葉あそび「音節遊び（長音、拗音）」	1/16 公開 検証保育	リミック・指人形・さいころゲーム 友達と話し合い、みんなで遊びを決める
1/9	さいころゲーム	1/22	友達と話し合い、みんなで遊びを決める 伝承遊び「あぶくたった」

4 本日の流れ

日案		平成21年1月16日(金) 男17名 女16名 計33名 たんぼぼ組 担任 上原直子			
前日までの幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・文字に興味を持ちはじめ、「トマトは、下から呼んでもトマト。上から読んでもトマトだよ」「かまきりの『か』は、かいとの『か』だよ。」と会話が聞かれるようになってきた。 ・それぞれの思いでゲームに取り組むので、意見が対立しゲームがまとまらなくなる。 ・個々での遊びに取り組んでいる姿はみられるが、集団としてまとまらない。 ・廃品を使って、キャラクターを作り、それをごっこ遊びに取り入れている。 ・年賀状が届いたのをきっかけに、手紙をやりとりしている姿がみられる。 	本日のねらい・内容	友達と一緒に、遊びを進めていく楽しさを味わう。 言葉や数を使ったいろいろな遊びに触れ、その楽しさを味わう。 <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びに興味を持ち、繰り返しやってみたり、ルールを守って遊ぶ。 ・思いや考えを出し合って、自分たちで遊びを進めていく。 ・遊びの中で、文字や数に興味を持ち、自分たちの遊びや生活の中で使ったり、おもしろさ便利さに気づく。 		
時間	予想される幼児の主な活動	教師の援助	予想される幼児の活動、言動	♥育てたい姿	<> 遊びの種類、主な領域
8:15	登園	<登園～身支度> 朝の出会いを大切に、一人一人に声をかけ、挨拶を交わす。心身状態を把握する。 安心した気持ちになり、自分の想いを伝えたいくなる。 朝の活動 幼児の話聞き、一人ひとりを受け止め、信頼関係を深める。 <片付け> 活動の終わりや生活の終わりに使った物を元に戻し、きれいになった事を「気持ち良い」と思えるように生活のリズムとして身につけていく。 クラスのひととき クラス全体で楽しめる活動を取り上げ、協同して活動することの充実感を味わえるようにする。 <ミルクを飲む～降園> 当番活動 みんなでミルクをいただく 片付け、降園準備 楽しい雰囲気の中、マナーを守って飲むようにしていく。 <降園> 一日を振り返り、気付いたり考えたりできるような話を話題に取り上げる。	<サイコロゲーム> ♥友達と相談しながら遊びを進める。 ♥友だちと楽しく遊ぶ中で、ルール大切に気付き、守ろうとする。 ゲームの楽しさがわかり、徐々に自分達で進めていこうとする。 困った事があると、教師を頼りにする。 子どもたちと一緒にゲーム遊びを楽しみながら、ゲームを進めていく姿を見守り、必要に応じ援助を行う。	<すごろく、トランプ、カルタ> ♥遊びのルールや遊び方を伝え合いながら、友達と楽しむ。 ♥文字や言葉に興味をもつようになる。 取り出しやすい場所、遊びの空間を確保する。	
8:30	・あいさつをする ・身支度を整える ・出席ノートにシールを貼る。 朝の活動 ・花に水かけ、落ち葉拾いをする。 好きな遊びをする。 <室内> ・正月遊び(すごろく、かるた、トランプ等) ・たこ製作 ・さいころゲーム ・お手紙ごっこ <戸外> ・竹馬・フラフープ			(ホール) ・音節サイコロゲーム ・こま ・大型積み木	(絵本の部屋) ・かるた ・手紙ごっこ ・トランプ
8:45					
9:15					
9:30	クラスのひととき				
10:15	担任へ引き継ぐ ミルクをいただく 帰りのひととき 降園		<竹馬、フラフープ、こままわし> 友達と競い合って遊ぶ コツや技術的な援助を必要とする場面を捉え、挑戦する喜びや達成感を味わえるようにする。	<お手紙ごっこ> ♥文字に対する興味や関心を持つ 友だちに手紙を書くことを楽しんでいる。 五十音表を貼る、ポストを設置する等、環境構成を行う。	<製作> ♥イメージを共有しあい、遊びを進める。 気の合う友達とそれぞれの考えを出し合いながら、イメージのものを作っている。 教師は、幼児の動きを見ながら何を楽しんでいるかを見極め環境を構成していく。

5 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

今までの保育を見直し、理論や講師から学んだことを積極的に取り入れた。今までのワンパターンな集まりから、子ども達が集まりたくなるようなリズムやリトミックを取り入れ「集まりましょう」と言わずに、子ども達が集まりたくなるような場を設ける努力をした。本日は、「集まりましょう」という言葉かけをせずに、子ども達が集まることができた。

「自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れながら遊びを決める」という内容は、達成することができた。しかし、決めた遊びが「友達と楽しく活動するなかで、共通の目的を見だし、工夫したり、協力して遊びを進める」という内容を十分達成できなかった。

教師の思いとして、クラスで共通の目的がみいだせる「さいころ遊び」をとりあげたいと思っていた。子どもたちの意見に流され、まとめることが出来ず、教師の意図していたことを行うことができなかった。教師の思いと子ども達の思いをつなげることが、とても、難しいと感じた。

集団に関われない子への対応にどうしていいのかわからず、とまどってしまった。これからも、個々の関わりを視野に入れた保育実践に努めたい。

(2) 意見及び感想

今までの保育を変えようとしているのが、わかった。リズムやリトミックで、子ども達が楽しそうにしていた。

個に応じた対応を丁寧に行っていた。言葉かけも、個々を大切に言葉かけを行っていた。

人形を使って、「手洗い、うがい」の必要性を伝えていた。子ども達が自ら、手洗い、うがいを行っていたので、子ども達に伝わったように思う。

話し合いをどう捉えていたか。リトミックの場において、友達同士、考えを出しながら、パートナーを見つけていたので、話し合いも主体的に自分たちで話し合いを進めていく姿を期待したが、見られなかった。発達段階を考慮し、教師も対応していく必要があったのではないか。

今までの幼児の経験から予想を立てていく。幼児は、生活すべてが経験。いろいろな意見がでて当然である。それをどう教師が、方向性を示していくかが大切。

(3) 指導助言(沖縄キリスト教短期大学非常勤講師 大湾由美子)

子どもたちが、教師の体調や思いを受け止め、教師に寄り添い話を聞いてくれていた。大きい声を出すことがいいわけではない。状況に応じ声の抑揚や大きさを工夫することは、とても大切である。

子ども達の発達段階を考慮し、教師の意図をもって、活動を展開していくことは最も重要であり、その教師の意図に子ども達を導いていかなければならない。

教師の「意図する活動」と子どもの「やりたいこと」をつなげるような遊びにもっていくこと。

子どもの集中力を考えると、話し合いの時間が長かった。

子どもの生活は、連続的で子どもの成長を教師がしっかり抑えていたら、今日の教師の意図する保育につながる事ができていたのではなかったか。

他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする発達の時期を踏まえて、環境構成を行う。入園から、修了までの長期的な発達を踏まえた生活を見通した、指導を考えることが大切である。

仮説の検証

検証保育の中から実践事例を挙げ、具体仮説、 を検証する。

1 具体仮説 の検証

幼児の発達の状態や幼児の内面を理解しながら、環境を構成することで主体的な生活が展開できるであろう。

事例1) 登園が気持ちよくできない子への援助

場面	幼児の姿と教師の関わり T:教師	・教師のよみとり 言葉かけや援助
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">「朝の出会い」を大切に幼児を受入れる（信頼関係の築き）</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">順次登園 所持品の始末</p>	<p>1月7日 不安な気持ちで登園するA男を受け止める</p> <p>裏門からA男が登園。一学期後期までは母親と登園していたが、11月頃から、一人で登園するようになる。裏門からうつむきながらゆっくり歩いて登園するA男。</p> <p>T:裏門にいるA男に距離はあったが「A男さ～ん、おはよう～」と手を振った。</p> <p>A男は門から全速力でかけてきた。</p> <p>A男:「先生がいたから、走ってきた。」と笑いながら話してくれた。</p> <p>T:「一人で登園できるようになって、一つお兄ちゃんになったね」とA男を抱きしめると、満足そうな表情でクラスに入っていった。</p> <p>それをきっかけに登園時は、教師を見て笑顔で門から走ってくるA男の姿がみられるようになった。</p>	<p>A男の登園の様子から</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>・近頃、登園が遅くなってきている。今まで母と共に、登園していたため、一人で登園することに不安を感じ緊張しているのではないかと。</p> </div> <p>A男が安心して、登園できるような言葉かけを行う。</p> <p>A男にスキンシップをとり、全身で受け入れ心の安定を図る。</p> <p>自立している姿を伝え、自信を持たせることができるような言葉かけを行う。</p>
	<p>1月14日 家で楽しいことがあったB子</p> <p>B子:「先生、おはようございま～す」</p> <p>あいさつをしながら登園するY子。いつもの様子とは違いどこか、うきうきしている。「Y子さん、おはよう。今日はなんかいつもと違う感じがするな～」と問いかけた。すると、家での様子を話し始めた。</p> <p>B子:「あのさ～、お母さんが歯医者さんみたいに、グラグラしてる歯とったんだよ。お母さんが次、大人の歯が生えてくるって言ってた」と大きく口を開きみせてくれた。</p> <p>T:「おめでとう。大人の歯が生えてくるの楽しみだね。B子さん、お母さんに歯を抜いてもらったんだって」と周りにいたC子に伝えた。B子はC子にも、「この歯」と見せている。「C子もだよ」と見せ合い楽しそうに話ながら、保育室に入り、所持品の始末をした。</p>	<p>いつものB子の様子から</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>・いつものB子の登園様子は、教師からあいさつをしても、頭を下げるだけの返事であった。保育室に入っても、マイペースに黙々と、所持品の始末をするB子。そんなB子が進んであいさつしたことで輝いているようにみえた。</p> </div> <p>B子の嬉しそうな表情・態度を捉え、教師から積極的に声をかける。</p> <p>B子の嬉しいとの気持ちに共感し、他児にも伝え、他児とのかわりを持たせる。</p>

【考察】

以前は大切な朝の出会いをあまり意識せず、子ども達を受入れてきた。幼稚園に登園してくる子どもたちの心身の状態は様々で、日々変化している。その子ども達に登園時から温かく受け入れることで、子ども一人一人の心身状態の変化に気付き、多様なかかわりをもつことができた。こうした心の通ったかかわりや配慮を重ねていくことで、教師と子ども達との間に心のつながりができ、信頼関係を築く事ができてくる。また、子どもの成長をタイミングよく捉え援助したり、子ども一人一人を理解することにもつながっていく。朝の出会いは大変な時間であることを再確認することができた。

事例2) 集団にとけこめない子への援助

幼児の姿と教師の関わり	・教師のよみとり 言葉かけや援助
<p>1/2 2 ~クラスのひととき~</p> <p>クラスみんなで、話し合いをして「あぶくたった」をするようになった。すると、D子が「先生、やりたくない。粘土がいいと自分の気持ちを話し始めた。</p> <p>「はぁ、みんなで決めたのにやらないわけ~」「そうだよ、そうだよ」とD子は、みんなから責められる。</p> <p>「どうして、D子は『あぶくたった』は嫌なの?」と聞いてみた。D子は下をうつむきながら、「やりたくないのに・・・粘土がしたい」と一言。</p> <p>その様子を見て、D子のことを気の毒に思ったM子は以前も同じ様にD子が「粘土がしたい」と主張していた事を思い出し「前の時も、D子は粘土がやりたいて言ってたさ~だから、D子がやりたいて言うなら、D子だけは粘土させたら?」と、D子の気持ちを汲み取り、D子だけ特別でもいいのではないかと案を出した。</p> <p>「はぁ、そしたらいんちきさ~」という数人の男の子の意見に、D子の仲良しの友達が「そしたら、D子がかわいそうさ~」と言い合いになった。その気迫に負けた男の子たちがおされた形になり「いいよ。じゃD子だけ粘土やったらいいさぁ。」と、賛成した。D子の粘土をしたいという意見は通ったが、D子の顔には笑顔がなかった。</p> <p>教師は「もし、みんなと『あぶくたった』したくなったら、ホールに来てね。」とみんなに聞こえるようにD子に声をかけ、ホールに移動した。</p> <p>あぶくたったを始めて、二順目D子がホールの隅に立っていた。それにK男が気付き、「D子が来てるよ~おいで、ここあいてるよ」と誘ってくれた。それでもD子は気まずそうな顔をしてこない。その様子を見た仲良しのE子が迎えに行き「おいで」と手を伸ばすと、D子は、下をうつむきながらも手を出した。D子とE子手を取り合いながら、輪の中に入ってきた。その後、あぶくたったを楽しんでるD子の姿があった。</p>	<p>D子について</p> <p>気の合う2~3名の友だちの中では、自分の思いを主張しながら遊びを進めることのできるD子。時には、自分の思いを主張し、トラブルになることも多い。そんなD子が、クラスみんなとの集団活動になると、「いやだ、やりたくない。」と言い活動に参加せず教師の側にいたり、他児のすることを傍観していることが多い。</p> <p>今まで、D子が集団活動に参加できるようにと、教師が手立てを講じてきたが、そろそろ教師から離れ、D子が自分で解決できるよう促していく。</p> <p>D子とクラスみんなの様子を見守る</p> <p>・D子の表情から、粘土がやりたかったのではなく、集団遊びの楽しさが感じられず、仲間に入るタイミングがみつけれなかった事が読み取れた。</p> <p>仲のいい友達と遊ぶ楽しさがわかってるD子なので、自分の力でみんなの中へ入る事ができることを信じ、D子に選択を任せた。</p> <p>D子のことを心にとめながら、他の子とホールに移動した。</p>

【考察】

集団での活動になるとみんなの中にとけこめないD子に対し、今まで教師がいろいろ手立てを講じてきた。今回はD子の自立と乗り越える可能性を信じ教師が離れ、見守るように試みた。そのことによりD子は仲間の手助けを受けて加わることができ、D子やその周りの子ども達の内面的な成長を伺うことができた。そのことから、教師の援助は、必ずしも側にいて声をかけることだけが適切な援助ではなく、子どもの実態を把握し発達の過程で、子ども自身が困難を乗り越えようとする気持ちを大切に実態にあわせ見守る、離れるのタイミングを見極めていく事も重要なことだということを実感した。



みんなで「あぶくたつた」

以上のことから、幼児の発達の状態や幼児の内面を理解しながら、場面に応じた声かけや援助を行うことで、幼児が主体的に活動に取り組み生活が展開することができるようになった。

2 具体仮説 の検証

幼児が心を動かす体験を積み重ねながら、他の幼児と共感したり、感動を共有したりする喜びを味わうことによって、主体的な生活が展開できるであろう。

事例3) 協同して遊ぶ楽しさを実感できない集団への援助 「さいころゲーム」

日	幼児の姿	教師のよみとり 言葉かけや援助
1/6	<ul style="list-style-type: none"> 好きな遊びの時間にA男、N男、S男、S太、A子、M子と、さいころゲームを行う。 はじめてのゲーム遊びにどうしていいのか分からず戸惑いながらゲームに取り組んでいる。 次第に「やった～勝った」「はあ、負けた」と歓声があがるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師のよみとり 言葉かけや援助 初めての試みで、さいころゲームを教師主導で行う。 初めてのゲームに戸惑いを感じている、丁寧にルールを伝えていく。 ゲームに取り組んでいるうちに徐々に、気持ちの高まりが見られる。 好きな遊びの時間に、気軽にゲームが楽しめるように目の届くところにおく。
1/7 1/9	<ul style="list-style-type: none"> 「昨日やったさいころゲームが楽しかったから」とA男、N男、S太が「先生、さいころゲームやりたい」と誘いにきた。 「お友達、もっといたら楽しいよ。誘ってきて」と声をかけたが、それぞれで遊び始めていたため誘うことができず、教師を含め4人で遊んだ。 少ない人数で、ゲームを行う日々が続いた。 	<ul style="list-style-type: none"> A男、N男、S太の気持ちを大切に、共感しながら、さいころゲームと一緒に楽しむ。 数人の子が周りで見ている。誘っても仲間に入ろうとしない。やりたくてもどう入っていいのか分からないのだろう。 さいころゲームの楽しさをクラスみんなで共有したい。

1/9 クラスのひとつとき

- ・「今日ね、A男さん、N男さん、S太さんが楽しいことして遊んでいたよ」と話題を切り出した。「わかるよ、さいころゲームでしょ」と数人の子が答えた。
- ・さいころゲームのことについて、話をしていくうちに「先生、やりたい」と子ども達から、声があがった。
- ・クラスみんなで、さいころゲームを楽しむ。「勝った、勝った～Aチームの勝ちで～す」「は～、負けた～」
- ・勝敗のある遊びに一喜一憂し、全身で嬉しさ悔しさを表現してる様子。
- ・「楽しかった。また、やりたい」という子ども達に、「ここにさいころを置いて置くから、いつでも、お友達を誘ってやっていい」ことを伝えた。

クラスのひとつときで、一日の遊びを振り返る。

- ・数人の子が、さいころゲーム遊びに気付いていたことから、さいころゲームに興味を示していることがわかった。

教師は、子ども達が「やりたい」という気持ちが高まるように、気持ちを引き出すことを意識した会話をを行った。

ルールを説明した後は、経験のある子ども達に、リードを任せ、教師も一緒にゲームを楽しむ。

子ども達が手助けを求めてきた時は、必要に応じて、言葉かけや援助を行う。

教師も勝ったことを喜び、負けたことを悔しみ子ども達の気持ちに共感した。

- ・ルールが共有化され、遊びに意欲が見られてきた。

1/10

- ・好きな遊びの時間、友達を誘い合いながら、自分達でさいころゲームを進めている。
- ・何回も繰り返し遊ぶうちに、ルールを教えあってる姿や相手を思いやり、さいころを手渡してる姿、順番を守って遊ぶ姿がみられる。
- ・ルールを話し合っ、変えている姿が見られるようになってきた。

主体的にゲームに取り組む姿を見守り、友達同士の関わりを見守る。

相手を思いやってる姿やルールを守って遊んでいる姿を認め、その良さをみんなに伝える。

話し合いをしながら、ゲームを進めている姿を温かく見守る。

【考察】

少人数でさいころゲームを行うが、なかなか遊びが広がらなかった。クラスのひとつときの時間にクラス全体で、さいころゲームを楽しんだことで、仲間と勝ちを喜び、負けを悔しむ楽しさを味わった。その楽しさが心に残り、次の日も友達を誘い合っ、主体的にさいころゲームを進め楽しむ子ども達の姿をみることができた。このことから、教師が遊びのアイデアを提供し任せ、他の幼児と感動を共有する喜びを味わうことで、幼児の心をゆさぶり主体的な活動への展開につながるということがわかった。

教師は、幼児の中に「何を育てたいのか」を意識し、子ども達の「育つもの」を加味した遊びのアイデアを提供し、発達に必要な経験を保障していかなければならない。



クラスで楽しく



自分達で進めて

事例4) 協同して遊ぶ楽しさを実感できない集団への援助 『指人形・リトミック』

場面	幼児の姿	・教師のよみとり 言葉かけ、援助
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">クラスのひととき</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">集団のつながりを大切に（協同する喜び）</p>	<p>1月6・7日 ~人形のプーちゃん~ 初めての人形との出会いであったが、とても、興味深く関わりを楽しんでいた。 人形を身近な友達と感じ「また来てね」「次は、友達を連れてきてね」と期待を持って接してる</p> <p>1月16日 風邪をひいたプーちゃん 「ゴホン、ゴホン、プーちゃん、風邪ひいちゃったみたい」と投げかけると「大丈夫?」とプーちゃんを気遣う子ども達。子ども達との会話から手洗い、うがいの大切さを伝える。 「プーちゃん、手洗い、うがいするの忘れちゃったのね~だから、風邪ひいちゃったんだね。みんなは、大丈夫?」 「あっ、手洗ってない」と手を洗いに行く子がいた。その後、手洗い、うがいを意識して行う子が増えた。</p>	<p>・教師のよみとり 言葉かけ、援助 子ども達の身近な話題や生活に関連した話をとりあげ、子ども達との会話を楽しむ。 ・人形とのかかわりを楽しんでいる様子。子ども達の心をつかめるような話し方を工夫する。 ・風邪が流行っているため、風邪予防の手洗い、うがいの大切さを伝えたい。</p> <p>子ども達の声をひろいながら、会話を進めていく。 子ども達で、考えさせるような言葉かけを行う。</p>
	<p>~リトミック~ 1月16日 オルガンの曲に合わせ、いろいろな歩きをする。 教師の示した数に合わせ仲間をみつけグループになる。何回か繰り返すうちに、子ども達の様子にも、変化が現れてきた。積極的に「三人だって、一緒になろう」と呼びかける子やグループができた事を「やった~、やった~」と喜び、大はしゃぎしている子、子ども達の歓声が聞こえてくるようになった。</p> <p>4人グループを作るように合図をした時、2人と3人のグループができた。 「あれ、2人と3人だ~2と3でご5だよ。4にならんよ」 「今、4人グループだよ。できないよ。」 みんなで、話し合っている。 「じゃ、こっちに入ろう」と、4人グループになっていたB子が移動する。 「B子が、来たら6人になるんだよ~。それに、4人じゃなくなるし・・・」 「先生、どうしても4人にならないから、5人でもいい?」 自分達で解決方法を考え、答えを出していた。</p>	<p>・オルガンの曲をただ聞いている子、ふざけて踊りだす子、子ども達の反応は様々であった。子ども達の様子を見守る。 子ども達の様子に合わせ、曲の速さを変えていく。</p> <p>自分たちで、解決していく様子をあたたかく見守る。 自分たちで、解決できるよう言葉かけを心がける。</p> <div data-bbox="1018 1480 1457 1827" style="text-align: center;"> </div> <p style="text-align: center;">自分達で考えてグループを作る</p>

【考察】

幼児は、友達とのかかわりを通してより充実し、生活が豊かなものとなる。そこで、一人一人の思いがつながるような、幼児同士がかかわりあうことのできる環境を構成していったことで、子ども達は、主体的に遊びを展開していった。

以上のことから、幼児の発達に即し、教師が意図的に環境を構成する中で、幼児が心を動かす体験を積み重ねながら、他の幼児と共感したり、感動を共有したりする喜びを味わうことで、主体的に遊びを進めていくことがわかった。

研究の成果と今後の課題

幼児一人一人が自己を発揮し、主体的に活動に取り組むためには、心が安定し様々な活動のできる環境が必要と考える。教師は幼児を温かく受入れる姿勢と一人一人の発達に応じた言葉かけや援助を行うことを工夫することにより、幼児との信頼関係が築かれると考える。

このことを踏まえ、理論と実践を通して研究を進める中で、次の成果と課題を得た。

1 研究の成果

- (1) 幼児の発達を理解し生活に添った言葉かけや援助を行ったり、意図的に環境を構成していくことで、幼児が主体的に活動に取り組むようになり、集団の成長がみられなかった。
- (2) 流れいく一日（倉橋惣三）といわれているが、これまでの教師主導でコマ切れの日々を反省し、幼児の必然性から流れ変化する一日が子どもの成長に大切であることがわかった。
- (3) 幼児のつぶやきや行動を意識してみて行くことで、幼児一人一人の内面理解や発達のタイミングを捉え、適切な援助を行うことができた。

2 今後の課題

- (1) 幼児が主体的な活動に取り組むためのよりよい援助を探るために、日々の実践を記録する。記録を通して、実態把握につとめ、一人一人に応じたよりよい援助の手立てを考え実践を行う。
- (2) 幼児の発達段階を考慮した援助を実践するためには、全職員のチーム・ティーチングが大切である。よって全職員と共通理解を図りながら、見直していく必要があると考える。
- (3) 発達の連続性を考慮し、家庭・小学校と連携を密にする。

3 おわりに

本研究をきっかけに今までの保育のあり方を考え、見直していくことができ、これからの教員生活で最も意義の深い半年間となりました。また、多くの人々の温かい気持ちにふれ、恵まれた環境の中で学ばせてもらったことで、とても充実した気持ちで満ち溢れています。

今回このような研究の機会を与えてくださった宜野湾市教育委員会の先生方、温かく歓迎し励ましてくださった宜野湾市立教育研究所所長の長崎光義先生、研究所の入所を勧めてくださった宮城茂雄先生、宮城盛雄先生、研究に行き詰まった時、温かく励ましていただいた古堅宗篤先生をはじめとする、八木啓子先生、そして、職員の皆様。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

本研究を進めるにあたり、沖縄キリスト教短期大学非常勤講師の大湾由美子先生には、研究内容はもちろんのこと、人への温かい接し方、保育者としての姿勢、保育のあり方等を学ばせていただき、また、研修係長の田場先生には、温かい眼差しで、私らしく伸び伸びと研究をすることができる環境を整えていただき、研究の進め方、まとめ方や教育に対し向上していく気持ち等を学ばせていただきました。先生方のお力添えで、研究を進めることができましたこと、深く感謝申し上げます。

更に、縁あって一緒に研究を進めていくことになった同期研究教員、西川賢先生、多和田晴香先生、苦楽を共に励ましあうことで乗り越えてこれたと思っています。また、いつも温かく声をかけてくださったはごろも学習センターの皆様にも深く感謝申し上げます。とても、楽しかったです。本当にありがとうございました。

<主な参考文献>

- | | | | |
|--------------|---------------|----------|-------|
| ・文部科学省 | 『新幼稚園教育要領』 | | 平成20年 |
| ・文部科学省 | 『新幼稚園教育要領解説』 | フレーベル館 | 平成20年 |
| ・森上史朗 吉村真理子著 | 『保育方法 指導法の研究』 | ミネルヴァ書房 | 1998年 |
| ・武藤 隆 森上史朗 著 | 『保育内容 人間関係』 | ミネルヴァ書房 | 1998年 |
| ・岡上 直子 発行 | 『幼稚園じほう』 | 株式会社リポゾン | 2009年 |